

近代辞書の歩み

平成26年7月22日(火)～10月22日(水)

【第2版】



ごあいさつ

世間には小さな辞書ブームが起きていると感じます。きっかけは辞書編集者を主人公にした三浦しをん『舟を編む』（光文社、2011）のように思います。この作品は2012年の本屋大賞を受賞し、2013年に公開された映画も大ヒットしました。その後も『ユリイカ』2012年3月号「特集＝辞書の世界」（青土社）、飯間浩明『辞書を編む』（光文社新書、2013）、増井元『辞書の仕事』（岩波新書、2013）、松井栄一『日本人の知らない日本一の国語辞典』（小学館新書、2014）の刊行やETV「辞書を編む人たち」（2014年4月26日放送）の放送など辞書編集者に焦点をあてた出版や放送が続いています。

今回の企画展示は、『近代辞書の歩み』と題して、三重大学附属図書館が所蔵する大槻文彦『言海』（1889-91）から現在の辞書に至るまでの主要な辞書13点をご紹介します。これらの辞書はすべて日頃は一般書庫に配置されています。複本が多いために書庫に置かれている本もあれば、現役の辞書としては第一線を退いたために書庫に置かれている辞書もあります。とはいえ、そうした古い辞書たちも学生にとって学習の友として活躍した時代がありました。今回の展示では、辞書の進歩を見てとるだけでなく、古い辞書からそれが必要とされた時代を感じとっていただければ幸いです。

なお、今回は展示棚による展示のほか、館内一階に特別陳列棚を設けて複本を閲覧できるようにしています。三浦しをん『舟を編む』のすこし変わった題名は、「辞書は言葉の海を渡る舟、編集者はその海を渡る舟を編んでいく」という意味からつけられたそうです。辞書といえば電子辞書やインターネットによる利用が増えてきましたが、たまには気ままに辞書をめくることが言葉の海を渡っていただければと思います。

平成26年7月 三重大学附属図書館長 吉岡 基

近代辞書の歩み

1. 言海

813.1/089

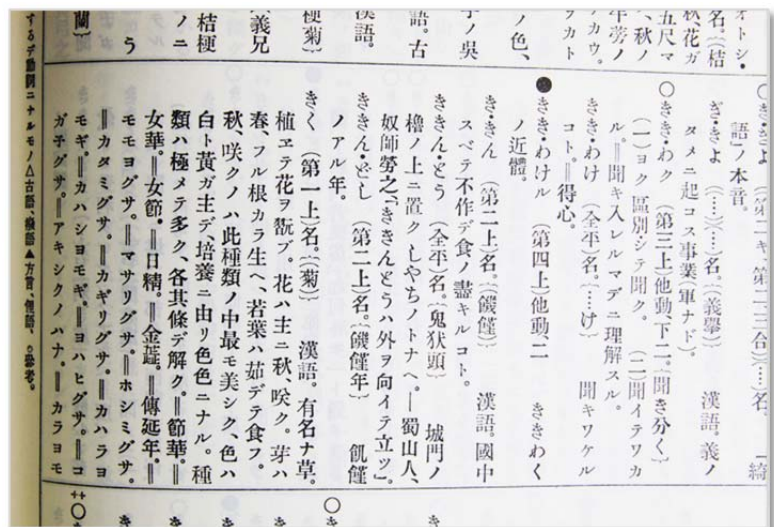
1 冊、大槻文彦編、私家版、明治 22 年（1889）～24 年（1891）刊。初版は 4 冊本で展示本は合 1 冊の後版。本文約 1100 頁、収録語 39103 語。ウェブスターやヘボンの辞書を参考に大槻文彦（1847－1928）が独力で編纂したもの。出版にいたるまでのさまざまな困難を記した巻末「ことばのうみのおくがき」は必見。本邦初の本格的国語辞書。その後の辞書に引き継がれた特色は、(1)基本語も含めた普通語を主とすること（従来は雅語が主）、(2)五十音順の配列、(3)近代的な品詞の分類、活用を示したこと、(4)段階的な語釈、(5)用例の収録、など。



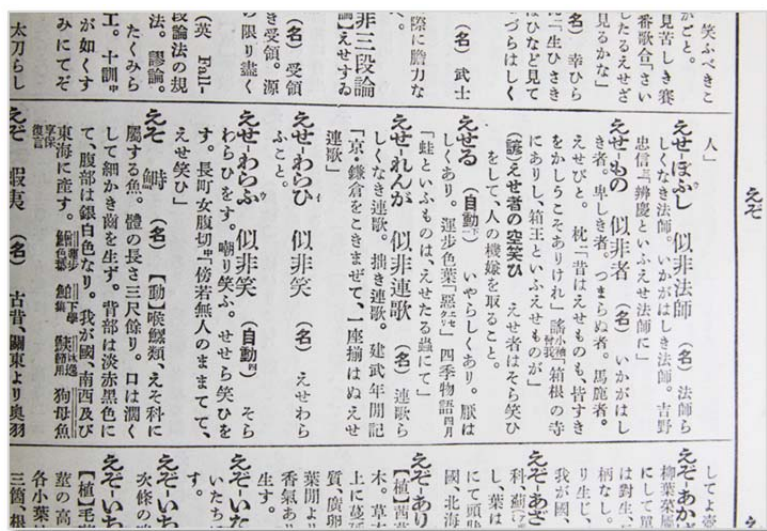
2. 日本大辞書（復刻版）

813.1/Y19

1 冊、山田美妙編、名著普及会発行、昭和 54 年（1979）刊。展示本は、山田美妙（1868－1910）による『日本大辞書』本編 11 冊補遺 1 冊（明治 25・26 年（1892・1893）、大日本辞書発行所発行）の復刻版。原本は本文約 1400 頁。山田美妙の口述速記で作成された。美妙は、尾崎紅葉とともに硯友社を結成した小説家としても知られるほか、詩作、評論、言文一致の理論構築と実践など多方面で活躍した。語釈において口語体が使用したこと、各語にアクセントをつけたことは本辞書が初めてである。



本編 4 冊・索引 1 冊、上田万年・松井簡治編、富山房・金港堂発行、本編大正 4 年(1915)~8 年(1919)、索引昭和 4 年(1929) 刊。1939~41 年に修訂版。1952 年に縮刷版。帝大教授上田万年(1867-1937)が共著者だが、実質的な編纂は松井簡治(1863-1945)のみが行った。見出語は 20 万 4000 語。松井はもともと英語を学んでおり、ウェブスター

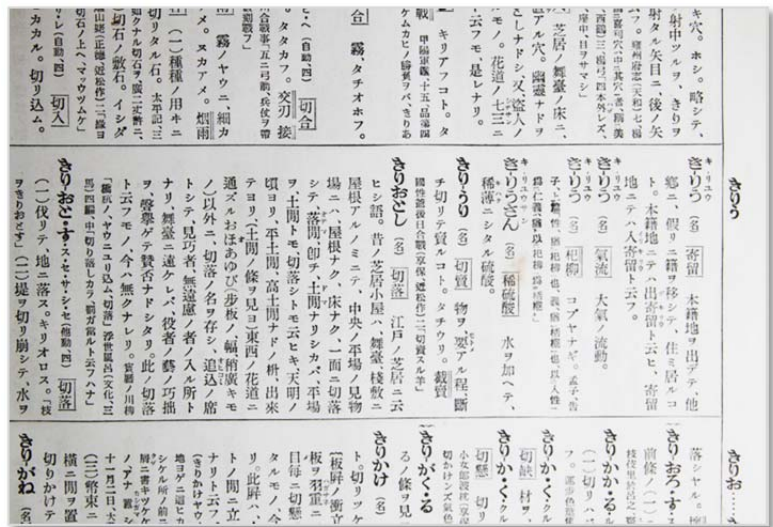


(1909 年刊ウェブスター新国際辞典で 40 万項目) など英語辞書に比べて国語辞書の遅れを感じていた。松井が集めた 40 万語の半分を立項している。日本史上空前の規模の大型国語辞書であった。上代語から現代語まで収録の幅が広い一方で、固有名詞はとらない方針をとっている。見出は歴史的仮名遣いの平仮名でとなりにカタカナで発音をつけた。

4. 大言海

813.1/089/1-5

本編 5 冊・索引 1 冊、大槻文彦編、富山房発行、本編昭和 7 年（1932）～10 年（1935）刊、索引昭和 12 年（1937）刊。言海の増補改訂版。言海の編者大槻文彦は昭和 3 年（1928）に没しており、国文学者関根正直（1860－1932）、のちの『広辞苑』の編者である新村出（1876－1967）らが完成させた。見出語が約 98000 語になった。『言海』に用例や語源的説明を増強した。見出語を現代かな遣いにした『新編 大言海』（昭和 57。図・開架・図書, 813.1/O 89）もある。



5. 大字典（縮刷版）

813.2/D19

1 冊、上田万年・岡田正之・栄田猛猪・飯島忠夫・飯田伝一編、啓成社発行、大正 6 年（1917）刊。実務を担当したのは栄田猛猪（1879-1962）。帝大教授の上田万年と岡田正之は指導的役割を果たし、飯島と飯田が協力して、11 年を費やして完成に至る。初版の親字(見出漢字)は 14924 字。展示本は大正 9 年（1920）の増補縮刷版。以後も増補と改訂が繰り返され、平成 4 年（1993）に新字体・現代仮名遣い・口語表現に改めた『新大字典』（講談社）が出るまで広く用いられた現役の辞書だった。親字に通し番号、部首にも番号を付けて整理した点が特徴で検索しやすい。また解説が詳しく、熟語や中国古典の用例も要所に記される。中国で編まれた『康熙字典』に範をとっているが日本の俗字も多く収録する。

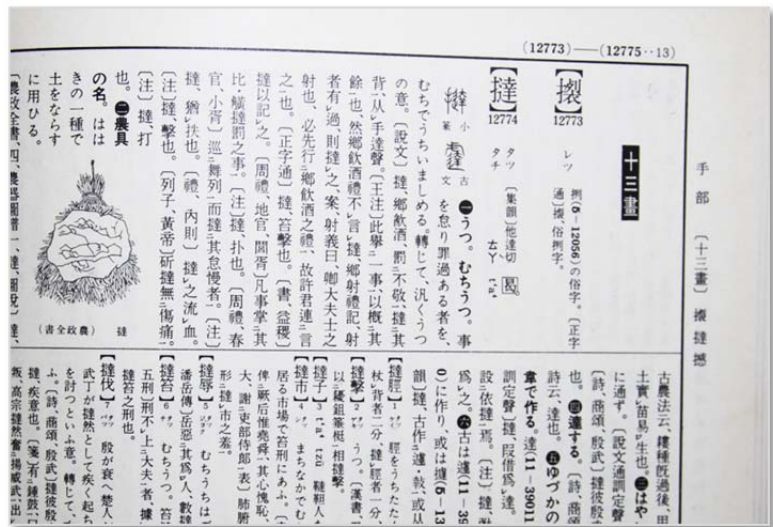


6. 大漢和辞典

813.2/M057/1

13冊（内索引1冊）、諸橋轍次編、大修館書店発行、昭和30年（1955）-35年（1960）刊。代表者諸橋轍次（1883-1982）の名前をとり、諸橋大漢和とも呼ばれる。初版の親字が50311。熟語は53万字余。世界最大の漢和辞書で、1980年代半ば以降に『漢語大字典』『漢語大詞典』が中国で刊行されるまでは世界最大の漢字辞書だった。初版は

12冊。のちに索引1冊、熟語索引1冊、補巻1冊を加えて、15冊構成になる。1925年の大修館の依頼より「最終原稿」を組み、1943年に第一巻を刊行するが、空襲のため印刷版をすべて焼失する。残された校正刷をもとに鎌田正・米山寅太郎らが中心となって再編。職工不足のため活字では刊行不可とみて、写真植字を使って一から組み直した。昭和59年（1984）に修訂版が刊行された。修訂二版（平成2）が最新の版で、「補巻」が平成12年（2000）に加わった。



7. 辞苑

813.1/SH64

1冊、新村出編、博文館発行、昭和10年（1935）刊。『広辞苑』のもととなった中型辞書。収録語は15万8000語。のちの『広辞苑』と同じ編集方針がとられ、語釈は簡潔にして、地名・人名・書名などの百科項目が多いことが特徴。



8. 広辞苑（初版）

813.1/Ko39

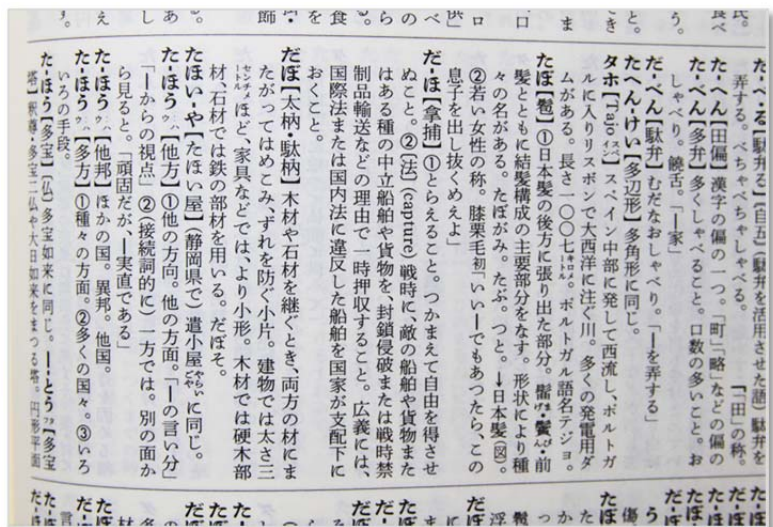
1 冊、新村出編、岩波書店発行、昭和 30 年（1955）刊。7 『辞苑』の増補修訂版のため『広辞苑』となった。収録語は初版で約 20 万語に増えた。語釈は語源に近いものから始める歴史的配列をとる。用例は古典中心。現代語の用例は簡単なもの。2 版補訂版まで見出語の活用が文語体で、現代語を調べるには不向きであった。また新村が形容動詞（静



かな、など）を認めていないので、形容動詞語幹は名詞扱いになっている。初版（1955）、2 版（1969）、2 版補訂版（1976）と続く。3 版以降は次項で解説。2 版補訂で 2 万語を入れ替えたとする。言葉の増補はその後も続き、版の更新の際に増補される言葉は社会的に認知された語としてマスコミが話題にすることが多い。

9. 広辞苑（第 6 版机上版） 813.1/Ko39/{1}

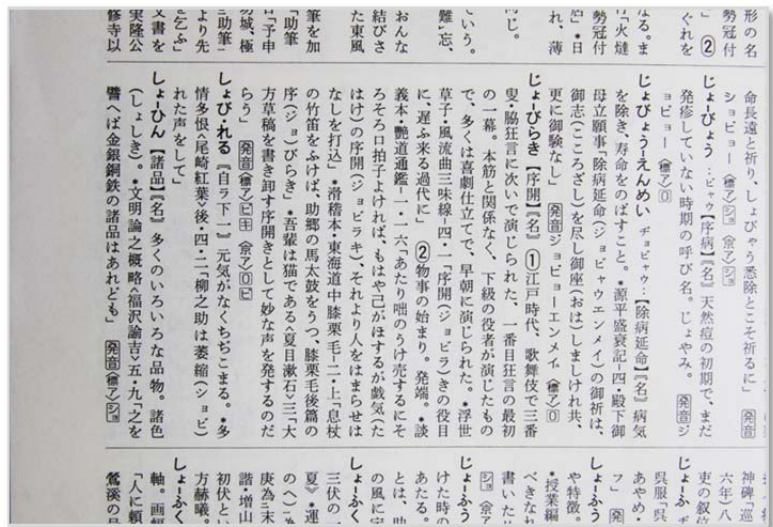
3 冊、新村出編、岩波書店発行、平成 20 年（2008）刊行。『広辞苑』の最新版。菊判（22 × 15 糎）の通常版に比べて机上版は B5 版（25.7 × 18.2 糎）で、字も大きい。本編 2 冊、付録 1 冊の 3 冊構成。6 版に至って収録語は 24 万語まで増えた。初版から 6 版までの累計販売は 1100 万部に及ぶという。3 版から現代仮名遣いが採用され（「葛籠」は「つ



ずら」から「つづら」の表記へ）、親見出語も口語形になった。フジテレビの深夜バラエティ番組「たほいや」（1993.4-9）で、参加者が作る嘘の語釈の中から『広辞苑』の本当の語釈を当てる「たほいや」というゲームが放送されたことがあった。もとは Fictionary という欧米の辞書を使ったゲームなのだが、『広辞苑』のような固有名詞の多い百科事典的辞書をつかわないとうまく遊べない。

10. 日本国語大辞典（初版） 813.1/N77/1-20

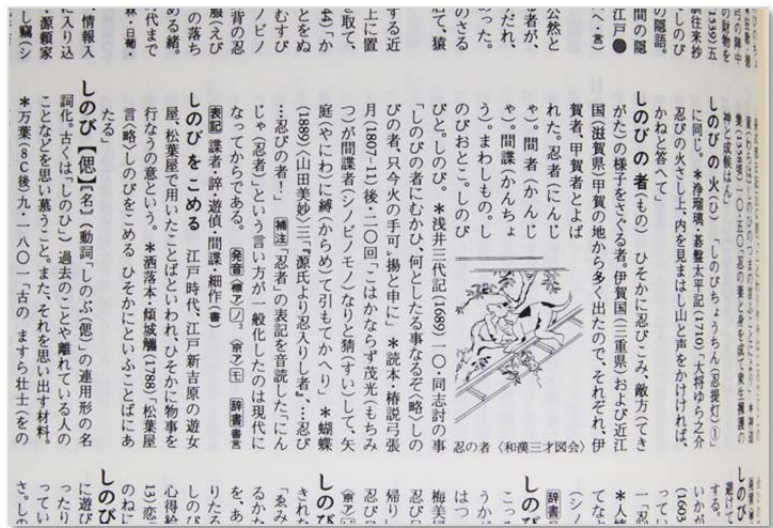
20 冊、日本大辞典刊行会編、小学館発行、昭和 47 年(1972) - 51 年 (1976) 刊。初版の編集委員は松井栄一 (1926-) のほか、市古貞次・金田一春彦・見坊豪紀・阪倉篤義・中村通夫・西尾光雄・林大・馬淵和夫・三谷栄一・山田巖・吉田精一など。中心的人物の松井栄一は 3『大日本国語辞書』の編者松井簡治の孫。松井簡治が残したカード資料が



出発点となっている。400 人ほどの学者の協力によって項目執筆された。初版は 45 万語を収録し、古語・現代語・方言・外来語・固有名詞など採録は多岐にわたり百科事典的要素も強い。語釈は歴史順に記述。用例も古代から近代まで 75 万例あって豊富である。語源や音韻史も記す。10 冊からなる縮刷版 (1979-81) もある。「日国」「日国大」の略称で研究者の友として親しまれてきた一方、日本語日本文学系の研究者の修行はこの辞書の語釈や用例の妥当性やその表記などを疑うところから始まるようになっていた。

11. 日本国語大辞典（2 版） 813.1/N77/1-13

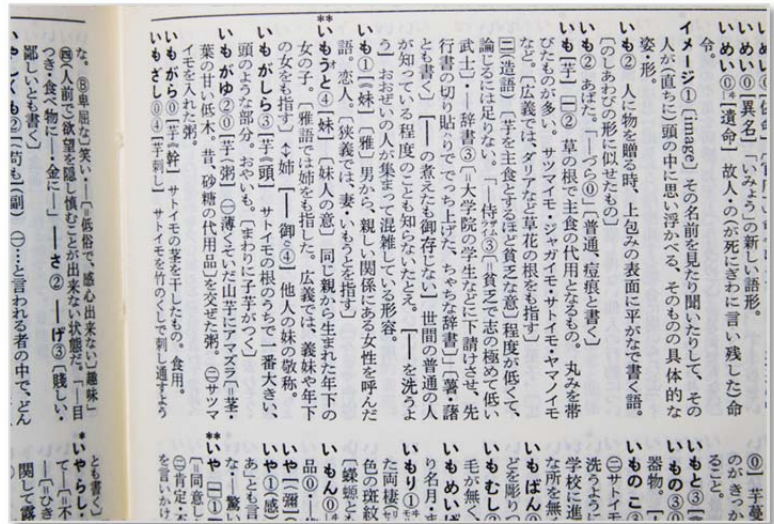
13 冊、小学館辞典編集部編、小学館発行、平成 12 年(2002) - 13 年 (2003) 刊。主な編集者は松井栄一のほか、北原保雄・久保田淳・谷脇理史・徳川宗賢・林大・前田富祺・渡辺実など。10『日本国語大辞典』の改訂版。30 年をかけて 3000 人の協力者を動員した。古典語が増補され、収録語は 50 万語となり、用例も再検討のうえ、25 万例を追加した。



用例には年代が記されわかりやすくなった。適否の判断がないといわれていた語誌も欄を設けて詳述されるようになった。初版から大幅に改良されている。2006 年に 30 万項目 30 万用例にしぼった精選版 3 冊が刊行された。精選版は電子辞書で利用可能。三重大学では附属図書館データベース一覧から JapanKnowledge を選ぶと、日本国語大辞典第 2 版が利用できる。

12. 新明解国語辞典（初版） 813.1/SH64

1 冊、山田忠雄ら編、三省堂発行、昭和 47 年（1972）刊。B6 変形版で、収録語は 76000 語ほどの小型国語辞書。編者は金田一京助・金田一春彦・見坊豪紀・柴田武・山田忠雄だが、金田一京助はほとんど関係していない。見坊豪紀（1914－1992）の編纂した『明解国語辞書』の改訂から始まっており、見坊が採集した語に山田忠雄（1916－1996）



らが語釈をつけて刊行した。山田忠雄による個性的な語釈に注目が集まり、赤瀬川原平『新解さんの謎』（平成 8）以降、その特異さがよく知られるようになった。「芋辞書」（初版）は皮肉が効いている。また編集者の山田忠雄と見坊豪紀との確執が取り上げられることが多い。平成 23 年（2011）発行の 7 版が最新版である。傾向として版を重ねるごとに、独特の解説・用例が平凡なものにかわっているのが惜しまれる。

13. 新明解国語辞典 (3 版) 813.1/SH64

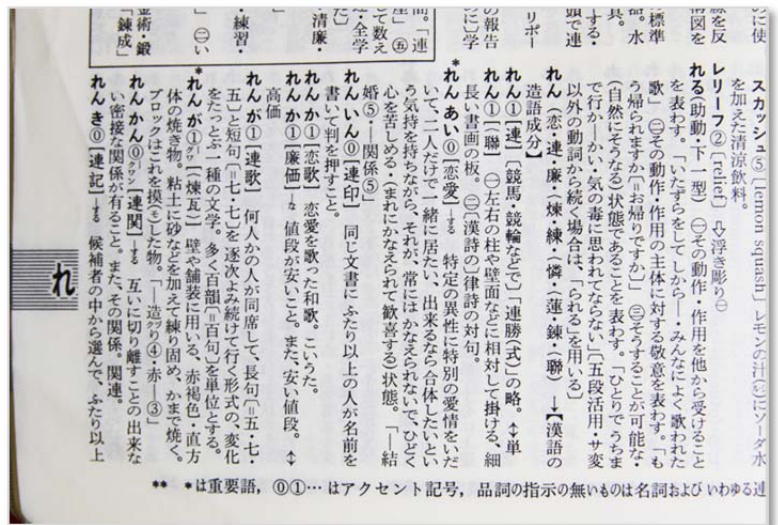
1 冊、山田忠雄ら編、三省堂発行、昭和 55 年 (1980) 刊。編者は金田一京助・金田一春彦・見坊豪紀・柴田武・山田忠雄。

昭和 18 年 (1943) 5 月初版の『明解国語辞典』を元に再編された。本書の主幹は山田忠雄だが、『明解国語辞典』では見坊豪紀の功績が大きい。見坊は『明解国語辞典』のために百四十五万もの用例を集めており、それらが本書に転用されたからである。

『新明解国語辞典』初版の刊行時に、山田と見坊の間に亀裂が生じたため、4 版の著者に見坊の名前はない。4 版では見坊にかわって山田忠雄の息子の山田明雄が入る。5 版・6 版は山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田昭雄が編者である。7 版は山田忠雄・柴田武 (この二人は没) のほか、酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之を編者とする。

本書の特徴は、語釈に編者の主観が含まれることである。辞書には、誰が読んでも頷ける、客観的で当たりさわりのない解釈を記すのが普通であるが、本書は明らかに編者の考えや体験を基にしている。「世の中」を例にとると、平均的な辞書である『明鏡国語辞典』第二版では「人と人が互いにかかわり合って暮らしていく場」と記すが、本書は「愛し合う人と憎しみ合う人 (中略) 常に矛盾に満ちながら、一方には持ちつ持たれつの関係にある世間」と記す。

本書の語釈は簡潔とは言い難く、自己主張が強いが、それゆえ他の辞書よりも、私たちが実生活で考えたり、感じたりすることに近い言葉で説明されている。まるで誰かの頭の中を覗いているようで、言葉を調べるのが楽しくなる辞書だ。版を重ねるごとに語釈が凡庸になった語がある一方で、「恋愛」や「読書」のように新たな語釈が付け加えられた語もある。



参考文献

- 山田忠雄『近代国語辞書の歩み』（三省堂、昭和 56。書庫 813.1/Y19/1-2）
- 沖森卓也編『図説日本の辞書』（おうふう、平成 20。開架 813/Z8）
- 加藤康司『辞書の話』（中公新書、昭和 51。開架 813/KA86）
- 高田宏『言葉の海へ』（新潮社、昭和 53。開架 914.6/TA28）
- 犬飼守薫『近代国語辞書編纂史の基礎的研究』（風間書房、平成 11。人文・日本語日本文学 813.1/I59）
- 紀田順一郎編『『大漢和辞典』を読む』（大修館書店、昭和 61。開架 813.2/D21）
- 岩波書店編集部編『広辞苑を 3 倍楽しむ』（岩波書店、平成 26。開架 404/Ko39）
- 増井元『辞書の仕事』（岩波新書、平成 25。開架 PB 813/Ma67。初出は文藝春秋、平成 8）
- 松井栄一『国語辞典はこうして作る』（新宿書房、平成 17。人文・日本語日本文学 813.1/Ma77）
- 倉島長正『日本語一〇〇年の鼓動』（小学館、平成 15。開架 813.1/ku55）
- 松井栄一『日本人の知らない日本一の国語辞典』（小学館新書、平成 26）
- 赤瀬川原平『新解さんの謎』（文春文庫、平成 11。開架 914.6/A32）
- 夏石鈴子『新解さんの読み方』（角川文庫、平成 15。開架 914.6/N58。初出はリトルモア、平成 10）
- 佐々木健一『辞書になった男 ケンボー先生と山田先生』（文藝春秋、平成 26。開架 701.2/Sa75）
- 武藤康史『クイズ新明解国語辞典』（三省堂、平成 9。書庫 810.4/Mu93）
- 武藤康史『明解物語』（三省堂、平成 13。開架 813.1/Me25）
- 『ユリイカ』2012 年 3 月号「特集＝辞書の世界」（青土社、平成 24・3。）
- 三浦しおん『舟を編む』（光文社、平成 21。開架 913.6/Mi67）
- 紀田順一郎監修『ことばのうみへ：大槻文彦と「大言海」』（紀伊國屋書店、平成 8。図・A V 資料, 020.2/Y 81/4）

後記

本展示の企画・制作は本図書館研究開発室協力大学教員の人文学部吉丸雄哉准教授および本図書館研究開発室長澤多代准教授が行いました。

展示の解説・解題執筆は第 13 項を除いて吉丸雄哉が、第 13 項の解題執筆は人文学部文化学科三年瓜生佐代が担当しました。本展示は長澤多代担当人文学部文化学科授業科目「情報サービス論」の協力を得ています。

展示品はすべて附属図書館の所蔵本です。

近代辞書の歩み 展示資料目録

発行 三重大学附属図書館

平成 26 年 7 月 21 日

この目録はインターネットからもご覧になれます。

URL http://www.lib.mie-u.ac.jp/r_and_d/research/exhibit/ka.pdf